

〔共同研究：「建学の精神」の哲学的・神学的再考—「生きること」の意味と「サービス」概念に関連づけて—〕

# 桃山学院大学に於ける 「建学の精神」と教育研究

—「キリスト教精神」への回帰動向と今後への課題—

谷 口 照 三

はじめに

## I. 「建学の精神」と桃山リベラリズム

1. 大学設置時における「建学の精神」の構想経緯
2. カンタベリー大司教の来校，理事長八代斌助の「識見」，そして「大学紛争」
3. 桃山リベラリズムとその背景

## II. 「建学の精神」の具現化への過度期

1. 「建学の精神」の具現化とハードウェア，ソフトウェアそしてパーソナルウェア
2. 「建学の精神」具現化とパーソナルウェアの静かなる，しかも力強い創造
3. 「建学の精神」具現化とハードウェアの漸進的創造

## III. 「建学の精神」への回帰とその具現化への冒険

1. 「建学の精神」具現化の新たな段階へ  
—ソフトウェアのバージョンアップへの期待—
2. 「建学の精神」具現化の深化的な段階への課題  
—パーソナルウェアからオーガニゼーションナルウェアへ—
3. 「建学の精神」の体現化としての教育研究組織への冒険

おわりに

## は じ め に

今日の世界では，企業間や国家間のグローバルな競争，さらには文化，宗教間の対立の激化が起きている一方で，地球環境問題などでのグローバルな協働が期待されている。「競争」と「協働」，この一見相反する性質をもつものが，同時に今日の社会動向を方向づけようとしている。おそらく，それらはいずれも欠くことができない要素であり，それらのバランスが社会やその歴史を形づけるものと思われる。かかる「バランス」をどのように捉え，あるいは考えていくかが肝要である。とりあえず二つの考え得るパターンを考えておくとよい。第一のパターンは，「競争」に軸を置き，それに寄与する「協働」を求めるそれである。第二のパターンは，「協働」に軸を置き，それに寄与する「競争」を求めるそれである。後者

---

キーワード：「建学の精神」，「自由と愛の精神」，「世界の市民」，スピリチュアルキャピタル，  
「観念の冒険」

の「協働」によって意味づけられた「競争」は、おそらく「個性化」と言い換えても間違いはなかろう。それは、どちらかと言えば、「他者との間の」と言うより、「個人の中での競争」（筆者は前者を「水平的競争」、後者を「垂直的競争」と呼んでいる）と表現した方がよいであろう。有効な、しかも満足のいく「協働」は、「差異の相互承認」の下での「差異」（個性）を生かしたネットワークによってもたらされる、と推測される。前者のパターンは、「覇権的」性質から自由ではなく、後者のそれは「理想的」性質を帯びている。いかなるパターンをわれわれは、選択、ないし志向するのか。

このような世界、社会情勢はそのまま高等教育機関である大学を巡る環境となり、そこでの問いへの応答は、大学における最重要課題となろう。教育・研究は、どちらかと言えば、第二のパターンを選択し、志向することと親和的であろうし、とりわけミッションスクールにおいてそれらは必然的なものとなろう。わが桃山学院大学は、カトリックとプロテスタントの中間に位置するキリスト教派である英国聖公会に属する宣教協会の宣教師、ワレン師（Charles Frederick Warren, 1841～1899年）らによって1884年に創設されたミッションスクールの男子英学校（Trinity Boys' School）を源流としており、「自由と愛の精神」としての「キリスト教精神」を「建学の精神」とし、そのもとに「世界の市民」を養成することを教育理念としている。そこでの教育・研究は、漸進的な「理想の探究」、「理想への道程」へと、未来を予想し、未来への応答可能性（responsibility）を拓くように、プロアクティブ（proactive）に構想し、実践されることが予想されている。

このような課題への応答を確実にしていくために、われわれに必要とされているのは、「建学の精神」と「教育理念」の理解と共有をより進化させることであろう。それは、様々な議論を媒介とした漸進的なプロセスの形成が必要であり、それが起動することによって、それらが組織的な「叡智」となり、真に「生きること」へと向けられた教育や研究が立ち上がっていくことが期待される。このような展望を抱き、われわれは数名で共同研究プロジェクト「『建学の精神』の哲学的・神学的再考——「生きること」の意味と「サービス」概念に関連づけて——」を立ち上げた（2011年4月～2014年3月）。かかるプロジェクトの成果として、各自がそれぞれの立場から、自由に「自由と愛の精神」について論じた書籍、『自由と愛の精神——桃山学院大学のチャレンジ——』を刊行するために、現在もこのプロジェクトは2年間継続し活動している。本稿は、本プロジェクトのこれまでの研究活動成果を踏まえ、かかる刊行物の背景をなすものとしてまとめたものである。

## Ⅰ．「建学の精神」と桃山リベラリズム<sup>1)</sup>

### 1. 大学設置時における「建学の精神」の構想経緯

桃山学院大学が経済学部の単科大学として設立されたのは、1959年である。それに先立つ

1) 以下、脚注をつけていない桃山学院及び桃山学院大学に関する事実は、次の文献によっている。

1955年に、初代学長となる勝部謙造は、桃山学院高等学校校長、桃山学院長、理事長に就任している。翌年、聖公会首座主教であった八代斌助が勝部の後任として理事長に、勝部は大学設置準備委員長に就いている。勝部は、旧制の桃山中学第17期卒業生であり、当時早稲田大学教授であり、兼任教授として加わる時子山常三郎に大学設置に協力を依頼している。

時子山は、創立20周年記念祝賀会挨拶で、以下のように述べている<sup>2)</sup>。「勝部委員長から大学の基本方針を立てるようにとのことでしたので、後に大学の設置要項としてまとめられた方針を進言したわけですが、まず、大学設置の第一条件として『本学は基督教精神を中心として人格を陶冶し、豊かな教養を体得させ、深い専門学術を研究し、教授することにより』ととりまとめ、ついで持論でありました『世界の市民として』という新しい用語を入れて『広く国際的に活躍し得る人材を養成し、国民社会、世界文化の発展に寄与することを目的』として設置するというので、院長先生のご了承を得たのでした。」

ここで語られていることが1958年9月30日付の『大学設置認可申請書』に「目的及び使命」として記述されたものであり、「基督教精神を中心として」が「キリスト教精神に基づいて」に、「国民社会」が「国際社会」に変更され、今日の学則第1章総則第1条「キリスト教精神に基づいて人格を陶冶し、豊かな教養を体得させ、深い専門学術を研究、教授することにより、世界の市民として広く国際的に活躍しうる人材を養成し、国際社会、世界文化の発展に寄与することを目的とする。」となっている。

## 2. カンタベリー大司教の来校、理事長八代斌助の「識見」、そして「大学紛争」

開学の年は、聖公会による日本での宣教が始まってから丁度100年にある記念すべき年であり、そのこともあってカンタベリー大主教、つまり聖公会のトップであるジェフリー・フランシス・フィッシャー (Geoffrey Francis Fisher) の司式により、開学式が1959年4月15日に挙行されたのである。誠にタイミングが良い。これこそ「神のおぼしめし」と言わざるを得ない。その後、1987年のチャペル建設地割式にカンタベリー大司教ロバート・ランシー (Robert Runcie) が、2009年の桃山学院125周年、大学50周年記念式典にカンタベリー大司教ローワン・ダグラス・ウィリアムズ (Rowan Douglas Williams) が来校している。これは極めて異例なことである。かかる象徴的な出来事は、「建学の精神」と「教育理念」にその都度光を当てる機会となった。

しかし、その光の中で「建学の精神」と「教育理念」を受け止め、それを具現化していく組織的な歩みはゆっくりとしていた。その原因は、幾つもの要因が絡み、複合的になってい

---

『桃山学院年史紀要』(1980年から毎年刊行)、『桃山学院100年のあゆみ』(1984年)、『桃山学院100年史』(1987年)、『St. Andrew's: 125 Years of Educational Endeavour 桃山学院創立125周年記念誌』(2009年)、西口 忠「大学の使命」(かつて筆者は仲間と私的な懇話会、『「建学の精神」と21世紀型大学経営』を考える懇話会を作っていた。その第1回目の講演者が西口氏であった。これはその時のレジュメである。)

2) 時子山常三郎「創設の趣旨を生かし前進を——創立20周年記念祝賀会挨拶から——」『アンデレ』(桃山学院大学同窓会誌)第11号、1980年10月。

たと思われるが、二つの大きな要因が少なからず影響していたと推察される。

一つは、この点はマイナスではなくプラスの要因としても捉えておく必要があるが、大変重要な視座である。それは、「カリキュラムにおいてキリスト教科目を選択科目としたのも、チャペルをもたないで発足したのも、大学の創設に力をつくした理事長八代斌助の」、以下のような、「識見である」<sup>3)</sup>。「信仰というものは強制するものではないし、学問もまた同様である。それ故、学生が受講してみたいと思うような内容の講義がなされるなら、学生は自ら集まってくるであろうから、必修という枠で縛り付ける必要はない。また、チャペルも、大学全体の意向として建設しようという機運が充実した時、その時代ならびに要望に応えるような規模と活動を担うものを、自分たちの手で建ててこそいみがあるのだ」<sup>4)</sup>。

今一つの要因は、1969年から数年続いた「大学紛争」の後遺症とも言えるかもしれない。「大学紛争」については、英語担当の元大学教員の 大谷泰照が興味深いことを語っている。「東京大学の紛争は医学部の問題から、日本大学は経理の問題から、桃山は『英語』で紛争がおこったと言っていいのかもしれない。英語の授業の休校が多い教員と学生の力を考えない高度な授業を行う教員を学生が問題にして紛争がおこりました」<sup>5)</sup>。開校当時からしばらくは、「英語の桃山」を標榜しただけに、英語の必修単位数は大学設置基準の2倍の16単位であり、全国でも最先端の視聴覚教育設備による音声指導を重視し、さらには入学時に一定のレベルに達しない学生を対象とした課外必修授業である補習授業を実施するというように、「英語教育の重視」を徹底していた<sup>6)</sup>。その後徐々に、「大学側の意図と学生の意識が必ずしも合致せず」、英語の必修単位数も減少せざるを得なく、「紛争」がおこるまでには設置基準の8単位となっていたが、伝統的に高度な教育を志向していたと思われる<sup>7)</sup>。もちろん「紛争」は、その問題のみに止まらず、「それが学内諸問題や大管法[大学管理法]にとび火したのは、やむを得ぬなりゆきではあった」<sup>8)</sup>。しかしその大きな影響は、カリキュラム全体の問題に及んだ。「『大学紛争』は従来のカリキュラムに変更をせまることになった」<sup>9)</sup>。「学生運動が学内で荒れたこともあり、大学はキリスト教の学校であることを学生にさえ周知できない環境にあ」<sup>10)</sup>り、その中で、カリキュラク改革に集中せざるを得なかったように思われる。

3) 『桃山学院100年史』, 449頁。

4) 同上。

5) 大谷泰照「桃山百二十年をどうみるか(第一回『桃山学院歴史の散歩道』)」『桃山学院年史紀要』第22号, 2003年。

6) 同上。『桃山学院100年史』, 478頁。参照。

7) 上掲書, 478~486頁。参照。

8) 同上。

9) 上掲書, 466頁。

10) 山田麻衣「松原栄氏寄贈資料の受け入れについて」『桃山学院年史紀要』第33号, 2014年。

### 3. 桃山リベラリズムとその背景

新しいカリキュラムは、大学内外でセンセーショナルな話題を提供した「プロジェクト方式のカリキュラム」であり、ここでは「学問展開の全体的な視野からとらえられた現実的な課題を中心的な柱に据え、これに関連する基礎的な教科目を系統的に配置し、それらを必要最小限の基礎知識をうる源泉として必修とし、それ以外に基礎科目と関連する科目を広く自由に選択して、個々の学生諸君の知的関心を中心とした学習を体系的に積み上げていくシステム<sup>11)</sup>が構想されていた。

この構想は、今から思えば「建学の精神」を土壌として生まれてきたように思われる。「建学の精神」に基づく「世界の市民」の育成に極めて適的な思考が幾つも見て取れる。今こそ、この方式をたたき台とし、今日の新しい社会問題状況を媒介に、真の「一般教育と専門教育の有機的連関」を展望すべきかもしれない。しかしながら、当時の「学生の自主性、自発性に絶対の信頼をおいて出来上がった新カリキュラム<sup>12)</sup>は、客観的な社会情勢の変化や学生の学習意欲の低下などの情勢変化などにより、種々の問題点が浮上し、数々の修正を余儀なくされ、「体系的に積み上げていくシステム」が崩れ、「安易な自由な選択」のみが残り、学生にとって「負担の軽いもの」となったようである。それ故に、さらなるカリキュラム改革の機運が全学的に浮上し、その後カリキュラムに関する議論が活発になり、幾度かの熱のある改革が試みられてきた。しばらくは、改革は以上のような背景から「体系的履修」がキー・ワードとなる。しかしながら、その中で徐々に「一般教育」と「専門教育」との緊張関係が表面化し、それも相まって、今一つのキー・ワードである「自主性、自発性を重視した履修」も重みをもってくる。このような流れを見てくると、きわめて雑であるが、本学のカリキュラム構築の視座は、揺れがあるけれども、後者のキー・ワードを軸に前者のキー・ワードとのバランスをいかに創り出していくかということのように思われる。一言で表現するならば、「(前者に力点を置いた) 緩やかな体系性」であろう。

「桃山リベラリズム」を以下のセンテンスで説明できるとはもちろん思っていないが、それは、少なくとも、「建学の精神」の具現化の進捗状況という論点に焦点を当てる場合、留意すべき点なのである。先の八代斌助の「識見」とかかるカリキュラムを取り巻くある種独特の風潮ないし特徴が重なり合い、あの「桃山はリベラルである」という評価が学内にも世間にも定着してきたように思う。しかし、これは「建学の精神」とは無関係とまでは言えないが、徐々にそれと離れた状況の中で創り出されたのではなからうか。「建学の精神」の具現化がゆっくりしていること背景には、これらの要因が控え置かれていたように思うのである。

11) 『桃山学院100年史』, 468～469頁。

12) 大谷泰照「桃山学院大学の歴史(一) 桃山と英語」『アンデレ』(桃山学院大学同窓会誌) 第9号, 1978年11月。

## II. 「建学の精神」の具現化への過度期

### 1. 「建学の精神」の具現化とハードウェア、ソフトウェアそしてパーソナルウェア

もちろん、カリキュラム改革の中から「人権教育の重視」や「論文指導」などの「建学の精神」に親和的な教育実践も生まれたが、その具現化への取組は意識的、体系的であったかとの問いには、不十分としか言いようがない。

「建学の精神」の具現化には、キャンパス構築などのハードウェア (hardware)、その内外で展開される諸活動を引き出す学部構成やカリキュラムなどを中心とするソフトウェア (software)、そして何よりも大事な前二者を結合する働きを創り出すヒューマンウェア、否パーソナルウェア (personal ware) が必要であろう。パーソナルウェアとは、ある意味で「魂」、現代的な言葉ではスピリチュアリティ (spirituality) ないし、スピリチュアル・キャピタル (spiritual capital)<sup>13)</sup> と言ってよいであろう。それは、「人間生活や社会をより良くすること」に係わる理想の構想力、理念力であり、それに基づいた行動力である。そして、それは、個人的なものから組織化されたもの、すなわちオーガニゼーション・スピリチュアリティ (organizational spirituality) ないしオーガニゼーション・スピリチュアル・キャピタル (organizational spiritual capital) へと熟成される必要があるだろう。

これらの関係をより正確に表現するならば、ハードウェアやソフトウェアは「建学の精神」を反映する媒体であり、その「反映する働き」がパーソナルウェアである、と言えよう。かかるパーソナルウェアは、それがコアとなり、すでに述べたように、オーガニゼーション・スピリチュアリティないしオーガニゼーション・スピリチュアル・キャピタルへの発展が期待される。その発展は、ハードウェアとソフトウェアを結び付けるパーソナルウェアの働きによって形成される、上向きの循環過程、スパイラル・アップしたプロセス (spiral process) の中で漸進的に創発される。またそのオーガニゼーション・スピリチュアリティないしオーガニゼーション・スピリチュアル・キャピタルがスパイラル・プロセスの持続性を可能にするように思われる。そのプロセスは、三者間の牽掛けの関係がスパイラル・アップしたものと考えるとよいかもしれない。第1図にそれを示しておこう。Personal Ware を PW, Organizational Spirituality を OS, Organizational Spiritual Capital を OSC, Hardware を HW, Software を SW として表記する。

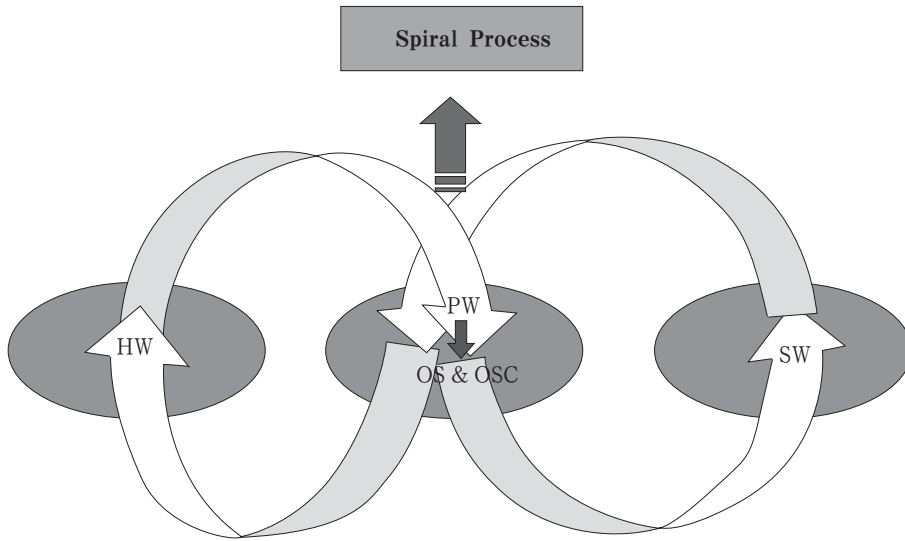
### 2. 「建学の精神」の具現化とパーソナルウェアの静かなる、しかも力強い創造

本学は、ミッションスクールとしては、「チャペルなきミッションスクール」<sup>14)</sup> と言われるようにハードウェアも、またカリキュラムを中心とするソフトウェアも決して十分ではなかつ

13) Cf. Danah Zohar and Ian Marshall, *Spiritual Capital*, Bloomsbury, 2004. pp. 1-34.

14) 靄井通真「三〇〇万人の大学 51 桃山学院大学 伝統のリベラリズムに試練」『朝日ジャーナル』Vol. 22, No. 14, 1980年4月4日。

第1図 Personal Ware 核とする Hardware, Software の Spiral Process



たが、言葉どおり個人的なパーソナルウェアが相対的に先行していた。とは言え、それは、「ハードウェアとソフトウェアを結合する機能」ではなく、「建学の精神の具現化への可能性」を予感させる、また少しずつそこへと近づけていく派手さはないけれど着実な働きとしてのものである。もちろん、この中には歴代の学長を入れなければならないが、ここで触れようとしているのは、チャプレンを中心とする人たちの働きである。

おそらく正式な最初のチャプレンは、岡 清三であろう<sup>15)</sup>。岡は、八代理事長の要請に応え、1964年9月に着任しているが、桃山学院九十年史において1965年4月1日に「チャプレンをおく」と記載されていることから、「この時点までは正規のチャプレンが置かれていなく、「新学期の発足と共にチャプレンの設置を制度化したものと思われる」と、回想している<sup>16)</sup>。しかし、「制度化」と言うけれど、「チャプレンに関する内規」の制定は1989年を待た

15) 『桃山学院創立125周年記念誌』の「歴代大学チャプレン」の項目(180頁)の最初に、「G. H. ギブソン 在任期間不明」と記されている。ギブソンは、英国聖公会のSPG派遣宣教師であり、英語を担当していた人である。岡は、「桃山学院大学の歴史(三)“われに従え”——過度期の十五年——」(『アンデレ(桃山学院大学同窓会誌)』第11号、1980年10月。)の回想文の中で、「ギブソンは学内の校宅に居住し、チャプレンを自認していたようである。」と述べている。『桃山学院100年史』によれば、「校宅」とは、「昭和町キャンパス内にあった米国聖公会寄贈の宣教師館」である。また、その続きには、「クレীগヒルは登美丘の学舎予定地に鉄筋2階建ての宣教師館を建てて、そこから昭和町に通っていた。当時は、大学キャンパス予定地の立て看板と登美丘寮が存在するのみで、あたり一面の松林の中に建てられた宣教師館に移り住んだクレীগヒル家の子供たちは、寮生にとっても格好の英会話の練習相手であったわけで、寮生の中にはクレীগヒル夫妻の感化を強く受けた学生もいた。」と記されている。岡もまた回想文の中で以下のように述べている。「アメリカ人宣教師L・R・クレイグヒルが一九六二(昭和三七)年に英語教師として着任している。彼は、バーチニア神学院の出身で、一九五二年に来日、京都、沖縄北海道(ママ)等で牧会に従事した後に本学の人となった。音楽を愛好する学究肌の人で、ギブソンの影になっていたのか表立った活躍を残すことなく一九六六(昭和三十九)年帰米している。登美丘の宣教師館はかれが建てたものである」。このように見てくると、岡の前に、正式ではないが実質的なチャプレンとしてギブソン、クレイグヒルがいたと言ってよからう。

なければならなかったことを思えば、それは脆弱なものであった。しかしながら、チャブレンは、本来の職務のみならず、大学設立当初から存在した学生のキリスト教サークル S・C・A (Student Christian Association) のメンバーを中心とした学生など共に「近隣の養護施設や心身障害者の施設で」の「ワークキャンプ」などを通して、精力的に「学生たちとの交わりを深め」ていった<sup>17)</sup>。なお、岡の回想には、「クリスマス礼拝にはグリークラブも加わるようになり」、「OBの参加者が増加し」、そのことによってこのような活動に同窓会はいろいろ経済的にも、精神的にもサポートしたことが記されていることを付記しておきたい。このような学生の自主的な「ワークキャンプ」なども一つの、「建学の精神」を反映した学生の活動を引き出すソフトウェアと言える。

さらに、それを通じた実践がパーソナルウェアをバージョンアップし、1985年から今日まで継続している「アジアの人々の協働から学ぶ」をテーマとする「国際ワークキャンプ」を起動し、発展させた。それは、学院創立100周年、大学創立25周年記念事業として、「数人の生徒で発足した学院の今日の発展を見るまでに受けた、内外および地域からの温かい支援へのお礼心から始められた」のである<sup>18)</sup>。当初、1985年の夏、それは立教大学ヒューマンリレーションキャンプ・イン・ザ・フィリピンに学生7名、教員1名が合流することから始められたが、その後インドのキャンプを経て、1987年よりインドネシア・ワークキャンプとなり、10名前後から30名弱の学生が、また引率としてチャブレンをはじめ3名から6名前後の教職員が参加した<sup>19)</sup>。我々は、ここに参加した人々の「想い」に気づき、それを受け止め、継承していくという「覚悟」を持つことによって、それを「形」にしていかなければならないであろう。そのためにも、このプログラムを提唱し、その多くに参加した藤間繁義の以下の深淵なメッセージを引用しておきたい<sup>20)</sup>。

教育も、植林も、共にその成果が発揮されるまでには長い時間を要します。しかし、

16) 岡 精三「桃山学院大学の歴史(三)“われに従え”——過度期の十五年——」。

17) 同上。S・C・Aは、1996年から活動停止であったが、「建学の精神」への回帰機運の高まりに応じて2011年から改めて活動を開始し、2014年現在で18人のメンバーを有している。特筆すべきは、ACUCA (Association of Christian Universities and Colleges in Asia: アジア・キリスト教大学協会) や CUAC (Colleges and Universities of the Anglican Communion: 聖公会関係大学連盟) の活動に参加していることである。また、以下の文献を参考にされたい。「座談会『大学開校時のS・C・Aの活動』」『桃山学院年史紀要』第22号、2003年、99～118頁。また、「ワークキャンプ」とは、別の言葉では「ボランティア・ワーク」とも言うが、それは「労働奉仕」のことであり、「古くから旧約聖書の中でも、仏僧たちの冷水、灌漑池堀掘削あるいは天理教の『ひのきしん』でも、自発的奉仕の行動として行われた」のである。藤間繁義「元理事長主教八代斌助師逝去三十周年記念 八代斌助宗教を偲ぶ」『桃山学院年史紀要』第20号、2001年、4～5頁、参照。

18) 藤間繁義「国際協力の懸け橋となることを願って——学生たちとのワークキャンプ四十五年を省みて——」、桃山学院大学インドネシア・ワークキャンプ実行委員会『アジアの人々の協働から学ぶ——桃山学院大学インドネシア・ワークキャンプの歩み——』聖公会出版、1997年、42～65頁、参照。

19) 上掲書、参照。『国際ワークキャンプ・インドネシア・20年のあゆみ』(2005年2月22日～3月7日までの第18回「国際ワークキャンプ」に参加した学生が中心となって作成したリーフレット)、2006年、参照。

20) 『アジアの人々の協働から学ぶ——桃山学院大学インドネシア・ワークキャンプの歩み——』、13頁。



人は将来に夢や理想を託しながら、今、種を蒔き、苗木を植え、水や肥料を注ぎ、幼い子供たちに教育を施すのであります。それは、気の遠くなるような長く、たゆまない努力を注がねばなりません。けれども、私たち、すでに少しだけ先に人生の渉みをしてきた者たちは、後に続く人々を信じつつ、今、苗木を植え、教育に情熱を注ぐのであります。私たち自身がこの目で確かめることのできない未来の成果を望みながら。

このような取り組みは、岡の退任後の松原 栄（1980年～1995年）、齋藤 壹（1995年～2001年）、磯 晴久（2001年～2009年、現在学院長）、そして現在の松平 功チャブレン（2009年～）に力強く引き継がれ、パーソナルウェア、スピリチュアル・キャピタルの一つを形成している、と言ってよい。今一つ付記しておかなければならないのは、先にも触れたが、このようなプロセスのコアとしての役割を果たした藤間繁義の存在である。藤間は開学2年後の1961年4月にキリスト教概論担当者として赴任しているが、大学の内外で多様な活動を実践し、とりわけ「自分のもっているすべての時間を使って学生に接することを厭」われない人であり、「草創期以来 [1997年3月の停年退職に至る] 36年間、大学の精神的なバックボーンとして、公私を問わず、大学の発展のために献身的に尽くして」来た人であった<sup>21)</sup>。まさに、「愛の実践と奉仕の人」と言ってよいであろう<sup>22)</sup>。

### 3. 「建学の精神」具現化とハードウェアの漸進的創造

以上のような「国際ワークキャンプ」の漸進的实践は、さらなるパーソナルウェアの成熟を呼び込み、構成員が意識しているかどうかには関係なく、組織の活性化の基盤となるスピリチュアル・キャピタルの形成に寄与したに違いない。しかしながら、このような動きや機運は、おそらくハードウェアの整備がなされなければ、本当に一部の範囲に止まっていたと思われるし、また逆に制度的、組織的には十分ではないにしても、このようなソフトウェアやパーソナルウェアの成熟がなければ、ハードウェア整備の機運も生まれ得ない。

1971年の堺市西野の登美丘キャンパスへの全面移転後、「建学の精神」である「キリスト教精神」に係るハードウェアの最初の整備は、本学のクリシヤン・ネームである St. Andrew's University に因んで名づけられた1973年1月の「聖アンデレ橋」、その後、同窓会の援助に

21) 岩津洋二「献辞」『桃山学院大学キリスト教論集 藤間繁義教授退任記念号』第33号、1997年3月。

22) 滝澤武人「編集後記」、上掲書。なお、「座談会 学問・個・信仰 そしてチャペル」(『アンデレ』第11号、1980年10月。)の中で、「自由の雰囲気溢れる『桃山』はいつまでも残したいね。そういう桃山の中であってチャブレンはやはり、いた方がいいよ。」という岡 精三の発言に対して、藤間は「そうですね。私なんか、学部が一つ増える毎に、一人のチャブレンをというように思っていました。社会学部が出来るときにもね。そうすれば、質の高いキリスト教教育が定着してゆくように思うのです。」との想いを語っている。なお、藤間と数十年間共に桃山で過ごしたわれわれにとって、とても印象に残っているのは、L・R・クレイグヒルが作ったと言われる登美丘キャンパスの「宣教師館」に住み、登美丘寮寮監を長く勤めたことである。岩津の言う「自分のもっているすべての時間を使って学生に接する」と言うことの中には、このことを指している。登美丘寮寮監を務める経緯を先の「元理事長主教八代斌助師逝去三十周年記念 八代斌助宗教を偲ぶ」の中で語っている。ぜひ参照されたい。

よるものであるが、最初はなかった図書館時計台の上にある十字架が設置された<sup>23)</sup>。その後、さらに1983年に教室棟として聖アンデレ館、そして大学創設30周年を記念して1989年4月に文学部を開設することに伴い、その直前の3月に聖ペテロ館、1990年1月に待望のチャペルが建てられたのである。しかし、ミッションスクールとしても、大学としてもさらなる発展のためには、登美丘キャンパスのさらなる充実を図らなければならないが、敷地の拡大において物理的および法的規制が存在し、1995年4月から現在の和泉キャンパスに再度の全面移転を行った。そこでは、チャペルが登美丘キャンパスのチャペルとほぼ同様の設計で再現され、聖アンデレ館は図書館などと個人研究室の11階建ての棟として、また聖ペテロ館は学長室をはじめとするほとんどの大学事務組織や理事長室をはじめとする学院本部組織、および会議室などの5階建ての巨大な容積を持つ棟として建てられた。また、食堂や大学生活協同組合設備のある聖バルナバ館、そして主として学生主体の催しのための講堂であるカンタベリー・ホール、さらに桃山学院の源流である男子英学校の創設者の一人であるワレンの名前を冠した、学生相談室もはいている学内宿泊施設ワレン館も新設された。三棟の教室棟や体育館など以外は、すべて聖人などキリスト教精神を体現するようにネーミングがなされている。その後、1999年に食堂や学生が自由に使用できる多目的室やホールがある聖マーガレット館が、2002年に法学部設置のため、模擬裁判法廷教室やコンピュータ教室などと情報センターが置かれている聖トマス館が、さらに大学創設50周年を記念し、キャリアセンター、国際センター、国際交流ホール、語学教室がある聖ヨハネ館が次々と完成した。

こうして、我々教職員、学生にとって、ミッションスクールである桃山学院大学の一員であることの自覚を「促し」、これまで創始者たちの想いとそれを歴史的に継承してきた人々の想いに心を寄せる機会となる可能性を拓く一つの環境であるハードウェアが形成された。とりわけ、チャペルの存在は、極めて重要な意味を持つ。それは、かかるハードウェアのコア、あるいはミッションスクールとしての桃山学院大学という「組織の重心」と言うべきものであろう。この言葉は、林 徹が集団や組織における「人間同士の社会関係」形成の「一連の流れ」、例えば「誰が誰とどのように関係を結び、それを継続し、さらにそれを変更しあるいは解消したか」というような「流れの中心をなす具体的な人物やその考え方のこと」示すために用意したものである<sup>24)</sup>。しかし、そのような「人間同士の社会関係」形成は、なんなる人間関係のみでなく、事物、建物などを巻き込んだ複合的な世界、つまり人と事物・建物間の相互的意味付与の世界の形成であると考えられる。そうであるならば、そのように形成された「世界」、つまり本稿で言うところのパーソナルウェアないしオーガニゼーションナルウェアが凝縮された象徴的な意味として現れてくる「スプリット」がまさに「組織の重心」と呼ぶに相応しいのではないか。本稿でのそれも、ただチャペルのみでなく、このよう

23) 前掲、岡 精三「桃山学院大学の歴史(三)“われに従え”——過度期の十五年——」, および「座談会 学問・個・信仰 そしてチャペル」の藤間繁義の発言, 参照。

24) 林 徹『協働と躍動のマネジメント』中央経済社, 2013年, 12頁, 87~100頁, 参照。

な意味合いで捉えることがより正確な表現となるであろう。

### Ⅲ. 「建学の精神」への回帰とその具現化への冒険

#### 1. 「建学の精神」具現化の新たな段階——ソフトウェアのバージョンアップへの期待——

上述したハードウェアの整備を促進したパーソナルウェアの成熟は、記述した「ワークキャンプ」などの実践を背景とするものと共に、今一つ MICS と名づけられた UI (University Identity) 活動があったことを指摘しておきたい。それは、Momoyama Gakuin Daigaku Image Campaign Staff の頭文字をとったもので、1986年10月に、本学の社会的イメージを向上させる目的をもって、企画広報委員会のメンバーと共に、自発的に参加した教職員ボランティアによって構成された。当時の学長稲別正晴は、このような新たな教職員の協働に対してと同時に、「イメージアップは、たんに、学内外における PR を強化することだけではなく、今後の桃山学院大学のあるべき姿、すなわち、建学精神を発展させ、具体化するグランドデザインの形成を意味する」として、MICS に期待していた<sup>25)</sup>。

既述した「ワークキャンプ」の実践やかかる MICS の活動を背景とするパーソナルウェアの成熟、またそのオーガニゼーションウェアへの発展は、上述したハードウェアの整備を促進し、またそれに止まらず、それと共に1990年代からのソフトウェアというカリキュラム改革の主体的要因を成すものとなった、と推察し得る。他方、かかる改革の客体的要因は、いわゆる「大綱化」と言われる大学設置基準の変更である。

1991年の「大学設置基準」の「大綱化」とは、「一般教育と専門教育の区分の廃止」、「一般教育の科目区分の廃止」、「カリキュラムの自由化」のことである。それによって「各大学が、自らの責任において教育研究の不断の改善を図ること」が示唆されたのである。それは、いわゆる新自由主義的な自己責任原則による志向性を認めざるを得ないが、我々私立大学にとって「建学の精神の具現化による個性化」の最初の好機でもあったことも事実であろう<sup>26)</sup>。

かような「主体的要因」と「客体的要因」の結合によって、1990年代から2000年代の初期にかけてのソフトウェアの中心とも言える大学全体でのカリキュラム改革が行われた<sup>27)</sup>。以

25) MICS は、「MICS NEWS」を第1号(1987年1月30日)から最終号の第18号(1989年3月30日)まで発行している。MICS は、聖ペテロ館が竣工され、念願の文学部開設も適い、そしてチャペルの竣工の目処が付いた1988年度末に解散することとなった。稲別の「MICS に期待する」は「MICS NEWS」第1号に掲載されている。ちなみに、企画広報委員長として、この活動を牽引した今は亡き岩津洋二は、我々の研究プロジェクト「『建学の精神』の哲学的・神学的再考」の最初のメンバーであった。

26) 大学教育改革及び大学審議会、中央教育審議会等については、ここではこれ以上コメントはしないが、以下の拙稿で批判的に検討している。参照されたい。谷口照三「現代社会の問題状況と高等教育改革への洞察——『世界への愛』とプロセス哲学を視座として——」『総合研究所紀要』(桃山学院大学)第40巻第3号、2015年3月、135～160頁。谷口照三「大学教育改革と『建学の精神』具現化の方向性——桃山学院大学の可能性を展望する——」、谷口照三、伊藤潔志、石川明人編著『自由と愛の精神——桃山学院大学のチャレンジ——』(桃山学院大学2016年度学術出版助成に応募のため、2015年10月30日に総合研究所に提出。審査で承認された後、2016年秋までに刊行予定)。

27) カリキュラム改革については、1997年度末のカリキュラム検討委員会準備会報告(1996年度カリキュラムの説明文、1995年1月13日付のカリキュラム改革委員会「カリキュラム改革の概要」も含む)、

下その概要を見ておこう。「大学設置基準の大綱化」後から今日までの大学全体としてのカリキュラム改革は、実は二回しかない。

一回目は、1992年度より1995年度からの新キャンパスでの実施を目指した改革であったが、その新カリキュラムは学部間の、特に「一般教育と専門教育の関連」についての合意形成に時間を要し、1996年度からの実施となった。そこでの改革の主たる点は一般教育等の「共通基礎科目」、「共通教養科目」、「共通自由科目」への再編であり、それらの履修条件は「各学部教育の独自性の尊重」の下に各学部の判断に委ねられた。『『一般教育』に関する規制が緩んだということは、なし崩しに取り崩してしまっても構わない、というメッセージを文部省が出した、という解釈に基づいて、ことが進んでいる」とまでは言えないが、どちらかと言えば、これまで以上に専門教育重視の傾向が強まったことは否めない。また、「建学の精神」の具現化の意図は、この改革においては中心的な場に据えられてはいない。しかし、カリキュラム改革についての説明文において、以下のことが記されていることは、是としなければならない。「本学の建学の理念にいう『世界の市民』は、いかなる国、民族、固有文化にたいしても自らが帰属する共同体、その文化、そのメンバー、に対するのと全く同等の立場で接することを当然のことと考え、そのような態度で行動する自立した人格を持つ人々のことである。しかし、歴史は、そのような『世界の市民』となることが決して容易ではないことを教えている。私たちの新しいカリキュラムが、なかでも共通教育科目が、この困難であるが重要な課題に挑戦し、目標達成の一助となることを私たちは目指したいと思う」<sup>28)</sup>。さらに、「現代社会における人権問題は、狭義の差別問題のみならず、戦争や飢餓、環境問題まで及ぶ広範な内容を持ち、大学はこれらの問題に積極的に取り組む使命を持って」おり、「本学もまたこの使命を担い、人権意識の覚醒に努めるものとする」と謳った、1992年11月20日の連合教授会にて制定された「桃山学院大学人権教育基本理念」に基づき、「人権教育科目改革」が行われたことも、付記しておきたい<sup>29)</sup>。

第二の改革は、1998年度から2002年1月まで計40回の検討委員会での検討を経て進められた。かかる新カリキュラムは、2002年度からスタートしている。前回のカリキュラム改革において「四年後の見直し」が合意事項とされており、その実行のため行われた。そこには、意図しながらも前回まとめきれなかった課題の早期成就が含意されていた。この改革で、公式的な目標とされたかかる課題とは、教育の実効性を高める趣旨から Semester 制への移行とカリキュラムの簡素化である。その課題は、達成された。しかしながら、かかる改革のなかで、内容面に着目するならば、特質すべき点が少なくとも二点ある。第一点は、「建学の精神」に基づく教育目標として謳われている「世界市民」（2単位）が全学必修科目として、

---

1998年度の第1回から2002年1月の第40回カリキュラム検討委員会の議事録および配布資料によっている。

28) 1995年1月13日付のカリキュラム改革委員会「カリキュラム改革の概要」。

29) 上掲「カリキュラム改革の概要」、桃山学院大学ホームページ（大学案内、本学の取り組み——人権への取り組み、「桃山学院大学人権教育基本理念」）、参照。

共通基礎科目に創設されたことである。今一つは、「『世界の市民』の育成は全学的課題であること」の共通認識のもとに、「全教員が全学共通教育を通じて世界市民育成に必要な教育に携わること」が合意され、共通教育科目の運営が改善されたことである<sup>30)</sup>。

「世界市民」の開設も、実は、前回の改革時に辿ることが出来る。既に述べた「人権教育基本理念」の制定前、人権問題委員会から1992年1月に「世界市民科目」の必要性が答申されていたのである。10年を経てようやく実現した。新カリキュラムにおいて、「世界の市民」に必要な基礎知識とその必要性に回答する講義群が、以下のように説明されている<sup>31)</sup>。「まず第1に、人権問題についての正確な知識と人権尊重の意識が、『世界の市民』にとっての不可欠な条件である。また、建学の理念に謳われているキリスト教精神の根本を理解することも、『世界の市民』には望まれる。さらには、グローバルな視野を養成するためには、多様な問題に関わる世界事情についての正確な知識の習得が必須となるであろう」。講義には以下のものが用意された。すなわち、「差別され迫害されてきた人々の歴史を学び、そのような過去への反省から人類が確立してきた人権の重要性を学ぶことによって、世界の市民に求められる基礎知識と基本態度の鍛錬を目的とする講義、キリスト教の歴史と現在についての認識を踏まえつつ、その根本的精神の理解を促進することを目的とする講義、担当する本学専任教員が自らの専門的研究内容にかかわる世界事情を解説し、グローバルな視野とは何かを学び取ることを目的とする講義、あるいはまた、担当する本学専任教員が自らの専門的研究内容と人権問題ないしキリスト教との関連を探究することによって、人権問題やキリスト教精神の理解を深めることを目的とする講義」である。

ここでは、極めて重要なこと、つまり専門教育と共通教育（教養教育ないし一般教育）の新たな関係構築が示唆されている。そして、この論点は、「世界市民」のみならず「共通教育」（語学やスポーツ・健康科学などを除き）に適用され、それを全教員で担う体制が作られたのである。先の改革時に学部間の合意形成がなかなか進まなかつた論点の一つは、この問題であった。ある意味では、この問題は先送りされていたと言ってよい。「一般教育」ないし「共通教育」は全教員で担うという体制を作り出すことで、従来からの課題に一応応答できた、と言うことが出来るかもしれない。しかし、「世界市民」の運営で示唆されている論点は、そこに止まらない。さらに、この点がより重要な論点であると思われるが、そこには、教養教育ないし一般教育の文脈の下での専門的な研究の必要性が含意されており、新たな「研究と教育の連関性」の構築という課題が提起されている、と見なければならない。この点がさらに探究されるならば、学生が「教養的内容」と「専門的内容」を密接な関係をもって主体的に学習する素地の形成に、大きな影響を与える可能性をもつ、と期待される。

30) これは、当時共通科目の運営責任学部であった文学部の共通教育将来構想検討委員会が「2002年度発足予定の新カリキュラムについて（案）」（2000年10月6日）を発表し、その後各教授会及びカリキュラム検討委員会での議論を踏まえ、連合教授会で全学的に合意された。

31) 第38回カリキュラム検討委員会（2001年7月12日）配布資料「共通教育科目の履修について」。

## 2. 「建学の精神」具現化の新たな課題

——パーソナルウェアからオーガニゼーションナルウェアへ——

過去二回のカリキュラム改革は、ある意味では、見てきたように、断続はあるが一つの連続したもの、と捉えることも出来る。それは、強靱な忍耐力を伴う、多くの人々の真摯な貢献があったの改革であった。そして、それは、「建学の精神」の具現化に一步、否それ以上踏み出たことは間違いない。しかしながら、いくつかの問題が残されていることも事実である。少なくとも、以下の点は、押さえておかなければならないであろう<sup>32)</sup>。

第一点は、ないものねだりになりかねないが、「建学の精神」の具現化が、部分的に止まり、システム化の方向性がまだはっきりとしていないことである。この探究の道が作られるかどうかは、以下の三点如何に依存しているように思われる。

第二点は、いわば、伝統的に論争の的になった「一般教育と専門教育の関連性」の問題である。先ほど触れたように、「世界市民科目」や「共通科目」の運用面では、「全員が担う」という合意形成は成されているが、現実にはそこに止まっており、「関連性」そのものに関して合意ある形で探究を深めることには繋がっていないように思われる。それは、多くの大学に一般的に見られた、一般教育担当者と専門教育担当者の対立が影を落としている結果であろう。

第三点は、第二点の結果でもあり、また逆にこの点が原因となり第二点の結果をもたらした、そのような問題である。二回目の改革において、前項で特筆すべき特徴として触れた、「教養教育ないし一般教育の文脈の下での専門的な研究の必要性が含意されており、新たな『研究と教育の連関性』を求める」ことを打ち出しているのではあるが、これについても、合意形成を漸進的に創造していくように探究が方向づけられることはなかった。

第四点は、第三点が進まなかった大きな直接の原因でもある。「新たな『研究と教育の連関性』」を始動し、それが活力ある形で持続可能性を維持し得るには、構成員個々人の自覚的献身と組織的なバックアップを欠かすわけにはいかない。前項で言及した『『世界の市民』の育成は全学的課題』を提起した文学部共通教育将来構想検討委員会「2002年度発足予定の新カリキュラムについて(案)」においても、この点に関して「個々の工夫と組織的対応が不可欠である」と強調されていた。より正確に表現するならば、個々の人々の創意工夫や能力を生き生きと引き出すオーガニゼーションナルウェアの成熟化が必要である、と言えよう。このことこそ、FD (Faculty Development), UD (University Development) と言わなければならない。しかしながら、それは、残念ながら、まだ途上と言わざるを得ない。そのために、個々人のパーソナルウェアとしてのパワーが弱まり、あるいは過重負担となり、革新的な応答可能性を弱め、カリキュラム上の良き意図が実現されないままになっているのが現状では

32) 以下の五つの段落は、煩雑さを避けるために引用符は付けていないが、前掲、谷口照三「大学教育改革と『建学の精神』具現化の方向性——桃山学院大学の可能性を展望する——」(谷口照三、伊藤潔志、石川明人編著『自由と愛の精神——桃山学院大学のチャレンジ——』)からの引用である。

ないかと、推察し得る。

これらの点は、提起されながら、すなわちその重要性について全学的合意がありながら、残念ながら漸進的發展へと向かうのではなく、不完全燃焼の事態に陥っており、大学にとって深刻な状態であるという認識を避けるわけにはいかない。かかる認識を共有し、上述の後者三点についての方向性を検討しながら、第一の点、つまり「建学の精神」をカリキュラムによりシステマティックに具現化する道を付けていくことは、桃山学院大学にとって焦眉の急であろう。

以上の課題への応答は、課題が共有されなければ意味がないが、その為にも、「『世界の市民』の育成は全学的課題であること」の共通認識のもとに、「全教員が全学共通教育を通じて世界市民育成に必要な教育に携わること」という合意事項にある「携わること」の多様性の可能性を認めることが、肝要であろう。「共通教育」を「全教員」で担うことは、そこに止まらず、「専門教育」の在り方も問うことになるからである。かかる多様性について議論し、展望することは、実は新しいカリキュラムを構想することにつながるように思われる。

その為の議論、対話は、「現代社会の問題状況」と「建学の精神」を媒介にする以外、効果的な方法はないように思う。幸いにも、1990年代後半から21世紀の最初の十年間の期間に、第1図 Personal ware を核とする Hardware, Software の Spiral Process における三者間のスパイラル・アップしたプロセスのなかで、パーソナルウェアからオーガニゼーショナルウェアへの成熟化への機運を感じさせる契機が相次いで用意された。

その最初の契機として、学院章の公式説明文が1996年に常務理事会において制定され、内外に発表され、さまざまな学院、大学の刊行物を通して眼にすることが出来るようになったことを、指摘できよう。学院章は、学院創設100周年に作られていたのであるが、公式説明文はそれまでなかった。それは、わが学院のクリスチャンネームである St. Andrew の象徴である「アンデレクロス」(X型の十字架)を SEQUIMINI ME (セクイミニ メ; 我に従え; イエスからかけられた最初の言葉)が支えるようにデザインされたものである。そして、公式説明文に記された「アンデレのように最後まで『自由と愛』のキリスト教精神によって生きること」にあるように、1999年に第18回宗教活動協議会にて、「キリスト教精神」をより内容がイメージされ易いように、「自由と愛の精神」と説明的に表現することが決定され、その後それが「建学の精神」を表す言葉となった。

そして、何と言っても、「世界市民」科目を擁した新カリキュラムにまさに魂を入れるがごとく、桃山学院大学広報誌『アンデレクロス』に、当時の村田晴夫学長(2000年4月～2004年3月)が「『世界の市民』に向けて」という副題を付けた「建学の精神」と「教育目標」に関する一連の論稿を発表したことに、触れないわけにはいかない<sup>33)</sup>。その一連の論稿

33) 「現代文明と教養——『世界の市民』に向けて——(1)」『アンデレクロス』96号, 2000年10月。「地域社会と世界市民のために——『世界の市民』に向けて——(2)」『アンデレクロス』98号, 2001年1月。「文明の変貌と転換——『世界の市民』に向けて——(3)」『アンデレクロス』102号, 2001年12月。「『自由』と『愛』について——『世界の市民』に向けて——(4)」『アンデレクロス』104号, 2002年

において、大学を含む現実の社会状況の分析と共に、社会的な広がり、哲学的な深みをもって、「建学の精神」について考究し、大学における研究教育のあらたな可能性を展望する一つの試みが、展開されている。学長室によって、それから約十年が経過したのではあるが、教育目標、ミッション・ステートメント、教育ビジョンなどを含めた「建学の精神等の系譜」（第2図、本稿の最後に掲載）が図式化され、2013年12月に大学評議会にて承認され、公表された。それは、一方的に成されたのではなく、短い期間ではあったが、大学構成員の声を聴取しながら策定されたことは、記憶に留めておいてよい。

### 3. 「建学の精神」の体現化としての教育研究組織への冒険

しかしながら、これらを契機に、過去二回のカリキュラム改革に残された課題への応答が「現代社会の問題状況」と「建学の精神」を媒介に継続的に成されたかどうかと問えば、残念ながら否と言わざるを得ない。その原因は、いろいろ考えることが出来るが、留意しておいてよい点は以下の二点である。

第一点は、1997年度末のカリキュラム検討委員会準備会報告において、「カリキュラム改革は授業改革がなされることによって実質的なものになる」という1995年1月13日付のカリキュラム改革委員会「カリキュラム改革の概要」の文面を引用し、それを根拠として、「枠組みいじりは上の課題〔セメスター制導入の検討、カリキュラムの簡素化、共通科目の運営体制の再編〕に必要な最小限にとどめ、むしろ、カリキュラム改革から授業改革へ、さらには自習をも含め学習改革へという視点で取り組むべきであろう。」と示された姿勢である。

第二点は、文部科学省や中央教育審議会等が推進する種別化構想のなかで戦略的要因として「学士力」、「社会人力」の養成を掲げ、「アクティブ・ラーニング」(Active Learning)と「プロブレム・ベースド・ラーニング」(Problem-Based Learning)などを推奨することから創られた「ティーチングからラーニングへ」の高等教育改革の文脈である<sup>34)</sup>。2002年度以降の動きは、第一の点が第二の文脈のなかで現実化されるそれであったと言えるか。

第一点で引用された前々回のカリキュラム改革委員会の文言は、委員の一部ではカリキュラムの変更より授業改革を行うべきだという意見もあったが、「個別的な授業改革もカリキュラム改革の動きのなかでこそ本格的に課題とされうると考えた」との見解の後に続いて述べられたものである。そこでは、一定の意味を持ったカリキュラムが授業改革の方向性や意味

5月。「『愛』そして『開く』ということについて——『世界の市民』に向けて——(5)」「アンデレックス」106号、2002年10月。「『自由』と『愛』と『家庭』——『世界の市民』に向けて——(6)」「アンデレックス」108号、2003年2月。「『生きられる学問』——『世界の市民』に向けて——(7)」「アンデレックス」110号、2003年7月。「世界の平和そして愛——『世界の市民』に向けて——(8)」「アンデレックス」112号、2003年12月。

34) この点についてのコメントは、以下の拙稿を参照されたい。前掲、谷口照三「現代社会の問題状況と高等教育改革への洞察——『世界への愛』とプロセス哲学を視座として——」『総合研究所紀要』(桃山学院大学)。前掲、谷口照三「大学教育改革と『建学の精神』具現化の方向性——桃山学院大学の可能性を展望する——」(谷口照三、伊藤潔志、石川明人編著『自由と愛の精神——桃山学院大学のチャレンジ——』)。



あいを与えることの重要性が、しっかりと捉えられていたのである。授業改革は、もちろん重要である。しかしながら、それは、「建学の精神」、「教育理念」、「カリキュラム」との関連のなかで、スパイラル・アップしたプロセスのなかにあるのではないか。その意味においても、大学を取り巻く現代の社会、環境状況との関連で「建学の精神」、「教育理念」を常に再解釈し、「カリキュラム改革」と「授業改革」の可能性を視野に入れておかなければならない。

また、ティーチングもラーニングも教育には欠かせない。教育プロセスは、「ティーチングからラーニングへ」と「ラーニングからティーチングへ」のスパイラル・アップした一つ一つのサイクルが多重化したスパイラル・アップしたマクロ・プロセスと考えることが出来る。したがって、「ティーチングからラーニングへ」、または「ラーニングからティーチングへ」は、一つのスパイラル・アップしたサイクルを構成するそれぞれ半分のマイクロ・プロセスである。そして、教育にとってとても大事な点の一つは、かかるプロセスを、人間の生きるプロセス、またそのための認識と行動の在り方に沿って解釈することのように思われる。それは、極めて重い課題であるが、実は一般的によく言われている。「問題の発見」、「問題の分析ないし理解」、「問題の解決」、これである。確かにこれは先の「大事な点」を一般化したものではあるが、ここには単調さ、無味乾燥さが漂いすぎる。人間の生きるプロセスは、もっとリズムカルである。ここに留意し、かかる教育のプロセスを解釈する必要がある。

アルフレッド・ノース・ホワイトヘッド (Alfred North Whitehead) は、このような視座から、教育プロセスを「ロマンの段階」から「精緻化の段階」、さらにそこから「普遍化の段階」へのマクロ・プロセスと、それぞれの段階にこれらの三つの段階が入れ子型に組み込まれているマイクロ・プロセスから捉えている<sup>35)</sup>。詳しい説明はここでは省略せざるを得ないが、ホワイトヘッドは、「ロマンの段階」と「普遍化の段階」を「自由」の、「精緻化の段階」を「訓練」の範疇で捉え、かつ「ロマンの段階」は前のプロセスの「普遍化の段階」を常に背景としており、それら二者はマイクロ・プロセスの連結ピンの役割を果し、マクロ・プロセスを構成している、と解釈している。ここには、リズムがある。それを、ホワイトヘッドは、真の教育プロセスには、「自由と訓練のリズミックな要求」がある、と捉えている。このような「リズムとプロセス」のなかで、「ティーチングとラーニング」の量的、質的割合に差異が生じるのは、至極当然のことであろう。断じて、二者択一ではない。このような考え方に立つならば、カリキュラムは、教育のリズムとプロセスを形にする枠組みと捉えることが出来よう。そして、かかる「リズムとプロセス」を誘発するのは、「建学の精神」であり、「教育理念」であろう。

35) アルフレッド・ノース・ホワイトヘッド著、久保田信行訳『ホワイトヘッド教育論』法政大学出版局、1972年、第二章、第三章、参照。ここで説明した「教育のリズムとプロセス」を以下の拙稿で図示している。谷口照三「現代社会の問題状況と高等教育改革への洞察——『世界への愛』とプロセス哲学を視座として——」『総合研究所紀要』(桃山学院大学)第40巻第3号、2015年3月、152頁、参照。

しかしながら、ただ単にそれらを言葉にし、唱えるのみでは、有為な「教育のリズムとプロセス」を誘発し得ないであろう。桃山学院大学において、部分的には「建学の精神」を反映し得てはいるが、すでに指摘したように、システマティックな具現化カリキュラムの形成にはまだ距離があるように思われる。それは、端的に言って、「建学の精神」についての継続的で、多様な対話や議論が活性化していない、ことに起因する。これから、かかる対話や議論の活性化を通して、「建学の精神」を解釈し、それを真の「教育理念」まで鍛え上げることが必要となろう。

筆者は、微力ながら、その一助となればとの想いで、いくつかの取り組みをしてきた。その最初の試みは、2000年7月19日に開催された桃山学院大学経営学部夏期拡大研修教授会での学部長としての報告「Faculty Development の理念——桃山学院大学の建学の精神と教育理念——」であり、第二回目の試みがそれを基礎に発展させた、2005年6月7日のキリスト教センターの「チャペルアワー」での「桃山学院大学の建学の精神と教育理念について」と題した話である。また、それらを下に、大幅に加筆し、2006年3月に『『世界の市民』パラダイムの可能性——桃山学院大学の『建学の精神』の解釈と応用——』（『キリスト教論集』第42号）を発表した。さらに、2011年度以降今日まで、共同研究プロジェクト『『建学の精神』の哲学的・神学的再考——『生きること』の意味とサービス概念に関連づけて——』を組織化し、活動してきた。このプロジェクトでの筆者の成果としては、『『生きること』とその意味の探究への一省察——ヴァルネラビリティとサブシディアリティ概念を媒介に——』（『桃山学院大学キリスト教論集』第49号、2014年3月）、「現代社会の問題状況と高等教育改革への洞察——『世界への愛』とプロセス哲学を視座として——』（『総合研究所紀要』第40巻第3号、2015年3月）がある。そして、『自由と愛の精神——桃山学院大学のチャレンジ——』を、今回、2015年10月30日に、2016年度の「学術出版助成」に申請することが出来た。これこそ、われわれの共同研究プロジェクトの真の成果である。本書の第一部では、『『自由と愛の精神』と『世界の市民』——『建学の精神』の具現化に向けて——』と題し、「建学の精神」と教育理念の「世界の市民」の解釈と実践、そしてそれらの桃山学院大学における歩みを今日の大学教育改革の批判的検討を媒介に取り上げ、「建学の精神」の具現化に向けて、展望を試みてきた。第二部は、「自由と愛」あるいは「愛」について、広いあるいは種々の視野から議論を深め、それを「自由と愛の精神」の広がりや深みを求めるプロセスにつなげることが出来ればとの期待から、「愛の諸相——『自由と愛の精神』の広がりや深みを求めて——』と題した。

これらは、「建学の精神」や「教育理念」が真に組織的な「叡智」となり、そこから「生きること」へと向けられた教育や研究が立ち上がってくることへの、われわれ共同研究プロジェクト『『建学の精神』の哲学的・神学的再考』の「観念の冒険」である<sup>36)</sup>。しかしなが

36) 「観念の冒険」は、以下のホワイトヘッドの著作のテーマである。Alfred North Whitehead, *Adventures of Ideas*, The Macmillan Company, 1933. ホワイトヘッド著作集第12巻, 山本誠作・菱木正

ら、「建学の精神」をダイナミックに、継続的に解釈し、それを真の「教育理念」にまで鍛え上げる組織としての働きへと繋げられなければ、それは単なる願望に終わりがかねないであろう。われわれには、関わる人々が生き生きと生きるコミュニティとして桃山学院大学という教育研究組織を活性化し、その活性そのものを促進し、また維持するための組織自体の「観念の冒険」を必要としている。それが始動し、定着への向かう傾向が強くなるならば、それはオーガニゼーションルウェアに止まらず組織自体のスピチュアル・キャピタ、つまり「組織をより良くする構想力、理念力、行動力」としての可能性が広がる。これは、前述した「組織の重心」と言っても差し支えなからう。

しかしながら、本学においては、そこへと向かうには、大きな課題が残っている。色々な点があるが、少なくとも、以下の点は早急に整理し、理解を共有化する必要がある。それは、「二つの建学の精神」という解釈に関わる点である。これは、直接的には学則第一号の記述によるところが多いように思われる。しかし、そこには、大変興味深い点と同時に危惧しなければならない点がある。「二つの建学の精神」は、ロケットと宇宙船に例えると理解しやすい。前者が「キリスト教精神」、後者が「世界の市民（の養成）」である。ロケットは、宇宙船を打ち上げた後は不要である。したがって、「二つの建学の精神」という言葉は影が薄くなり、「世界の市民（の養成）」が暗黙の内に「建学の精神」化している。本学に勤務して既に33年を過ぎたが、このような雰囲気広がっていることを否定しきることが出来ない。何故このような状況かと言え、深層のところでは「キリスト教との距離感をいかにすべきか」の苦闘もあるように思う。

上述のような解釈は、既に述べたように、継続的な「対話や議論の活性化を通して、『建学の精神』を解釈し、それを真の『教育理念』まで鍛え上げることが必要」であるとする立場とは、対立する。この解決のためには、「建学の精神」は「キリスト教精神」及び「自由と愛の精神」であり、「世界の市民」はそれに基づく「教育理念（的目標）」と、明確に区別と関連をつけるべきであろう。

今一つの「キリスト教との距離感をいかにすべきか」の問題については、より慎重さを必要としているかもしれない。学院が「キリスト教精神」を「自由と愛の精神」とすると決定したことは、この問題に対する一つの応答であったと、推察される。これに加え、よりプロアクティブには、EUの叡知に倣い、「自由と愛の精神」を「神意しんいの名において唱え」ることなく「人類の現実を見つめる私たちの明晰さの名において」<sup>37)</sup>、「キリスト教も含め種々の宗教や文化、人々の根本的な考え方に通底するものとして」提唱することが、肝要と思われる<sup>38)</sup>。

晴共訳『観念の冒険』松籟社、1982年。

37) アルベール・ジャカール、ユゲット・プラネス著、吉沢弘之訳『世界を知るためのささやかな哲学』徳間書店、1999年、72頁、参照。

38) 谷口照三『「生きること」とその意味の探究への一省察——ヴァルネラビリティとサブシディアリティ概念を媒介に——』（『桃山学院大学キリスト教論集』第49号、2014年3月、参照。

これらの点において合意が得られならば、人々が生き生きと生きるコミュニティとして桃山学院大学という教育研究組織を活性化する、組織自体の「観念の冒険」の可能性が拓かれるであろう。

## お わ り に

本稿では、桃山学院大学に於いて、「建学の精神」と教育研究、特に教育システム構築との関連を創立当時から今日までの歴史的動向を追いながら吟味し、今後の「建学の精神」の具現化への課題を展望してきた。その際、キャンパスなどのハードウェアとカリキュラムを中心とするソフトウェア、そして「組織をより良くする構想力、理念力、行動力」としての、つまりスピリチュアル・キャピタルを内包したパーソナルウェア、ないしオーガニゼーションナルウェアの、後者が前二者を媒介する三者間の相互浸透関係とそれらの成熟過程に着目した。

「建学の精神」具現化の究極の対象は、ソフトウェアとしてのカリキュラムを中心とする教育研究システムであるが、今回最後の節に「過去からの学びを契機に」と副題を用意し、その素描をとも思っていたが、その前に提示しなければならない課題を記述することに多くの紙面を費やした上に、未だあいまいな点が残っていたことから、かなわなかった。しかし、そのヒントは、既にそれぞれのところで触れているが、1970年度からスタートした「プロジェクト方式のカリキュラム」と2002年度から開設された「世界市民」科目の運用に関して提起されたことに含意されていたと思われる論点にある。しかしながら、これらの論点を取り込み、今日再構築するためには、最後に課題として提示した「建学の精神」に関する「組織自体の『観念の冒険』」が何よりも必要なのである。否、双方の動きが緊張関係を持ちながら、関係づけられなければならない、のかもしれない。今後の課題としなければならない。

本稿で最終的に提示したこの課題は、結局、多様な人が、多様な観点から「建学の精神」について、自由に解釈しながら対話や議論を交わし、そのことを通じて大学をすべての人々が生き生きと生きる得るコミュニティとして創造すること、と言い換えることが出来るであろう。

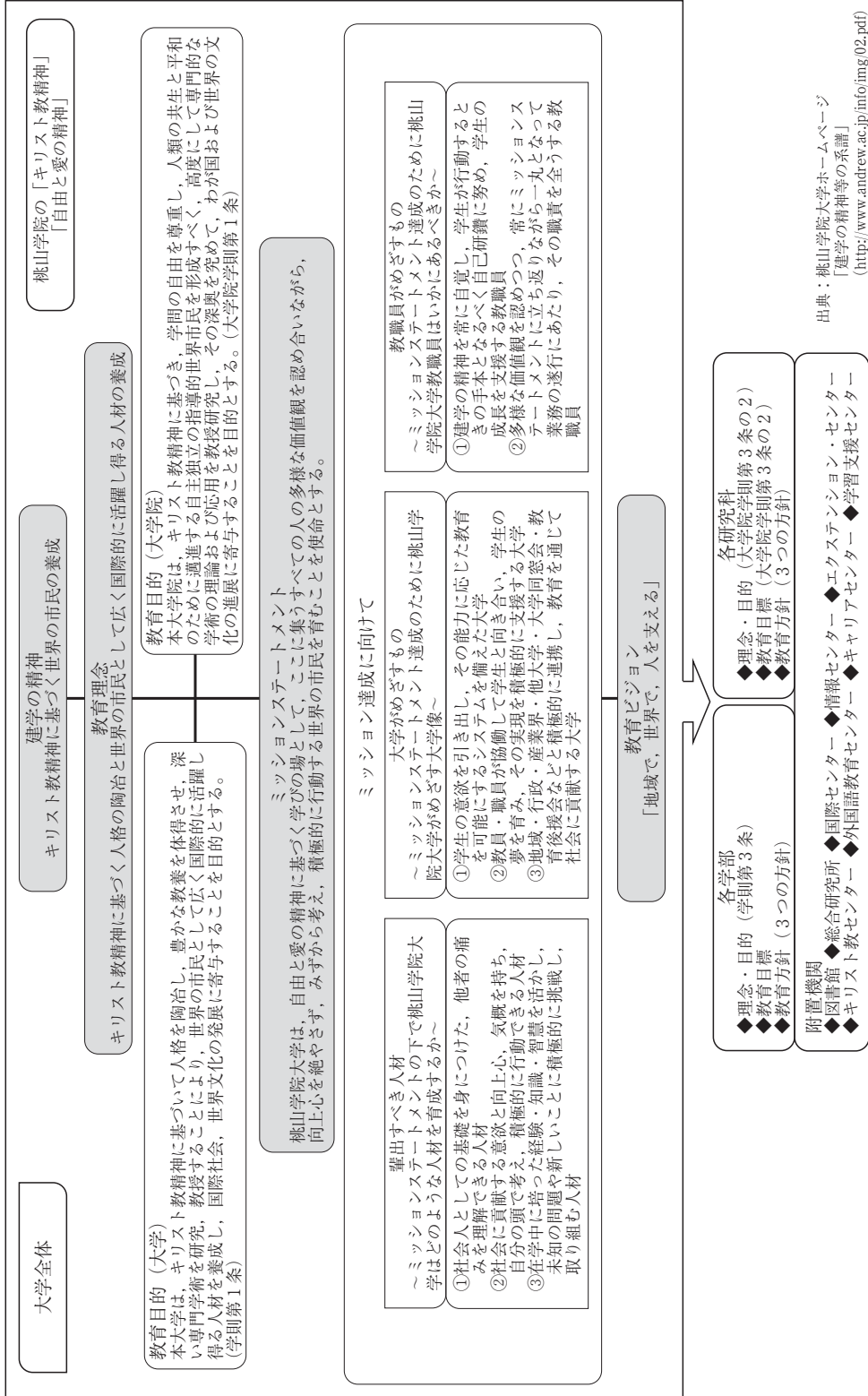
かかるコミュニティは、その内容面を表現するならば、インクルーシブ・ソサエティ (inclusive society) と言ってもよいかもしれない。筆者は、かつて拙稿『『世界の市民』パラダイムの可能性』のなかで、「世界の市民」は「異なる存在とか多様な文化が共生することを幸福と感ずる社会」である『インクルーシブ・ソサエティ』・・・に貢献」する人であると述べた。しかし、大学自体の「インクルーシブ・ソサエティ」となる必要性については、考えてはいたが、それを明示化するに及んでいなかった。筆者は、第57回キリスト教学校教育同盟関西地区<夏期研修会>(2015年7月30~31日)に参加したおり、講演者のルース・M・グルーベール関西学院院長から関西学院での「インクルーシブ・コミュニティ構築」についての話を聞くことが出来た。そこで、改めてその重要性に気づいたのである。ルース・M・グルー

ベル先生に、心より深く感謝したい。

われわれは、「建学の精神」を体現する「世界の市民とは何か」、その性質と働きに焦点を当てすぎていた。もちろん、「世界の市民」が「目指すべき世界」を展望していたが、「建学の精神」に係りそれを育てる「場」への配慮が十分でなかったことを認めざるを得ない。その「場」は、ミッションを果たすための諸力、たとえば人々の努力などを呼び込む、まさに「磁場」と言わなければならない。本稿において、「組織自体の『観念の冒険』」の表現をもって訴えたかったことは、この点である。

(2015年11月4日受理)

第2図 建学の精神等の系譜



出典：桃山学院大学ホームページ  
「建学の精神等の系譜」  
(<http://www.andrew.ac.jp/info/img/02.pdf>)

## Reconsidering the “Spirit of Foundation”

## at Momoyama Gakuin University

—— Recurring the “Christian Ethos” and Future Challenges ——

TANIGUCHI Teruso

In the world today, global competition between corporations and nations, conflicts between cultures and religions is intensifying. On the other hand, global cooperation on the environmental problems is expected. “Competition” and “cooperation”: Although they seemed to have the opposite characteristics, they are simultaneously directing the social movement of today. They probably are essential elements and it is considered that the balance between them figures out the society and its history. How you grasp or consider the balance is important. It is good to think about the two considerable patterns. The first pattern has “competition” as its axis, and “cooperation” that makes the contribution is required in the pattern. The second pattern has “cooperation” as its axis and “competition” that makes contribution is required in the pattern. It is not a mistake to say that the “competition” that was given meaning by “cooperation” in the latter pattern is the same as “individualization”. It may be better to express “competition within oneself” rather than that of “among others” (The author calls the latter “horizontal competition” and former “vertical competition”). It is presumed that effective as well as satisfying “cooperation” is done in the network that makes use of the difference (individualism) under “the mutual approval of difference”. The former pattern is not free due to the characteristic of “supremacy” and the latter has the characteristic of “idealism”. What pattern are we going to select or intend?

This world and social situation becomes the environment that surrounds universities, which is the higher education institution. Questions and answers may be the most important issue in the university. For education and research, they would rather select the second pattern making it the intention would have affinity. For mission schools, those are indispensable. The origin of Momoyama Gakuin University was Trinity Boy’s School founded in 1884 by Charles Frederick Warren (1841-1899), who was a missionary of Anglican Communion, which is a Christian sect that is in between Catholic and Protestant. And our educational philosophy is to nurture “citizens of world” based on “the foundation of the school” which is “the spirit of freedom and love” as “the christian ethos”. Therefore, education and research presumed the future with progressive “exploration of ideal” and “path to the ideal”, so they cultivate the responsibility of the future, and conceptualize and practices it proactively.

What may be necessary to respond to those challenges certainly is to share the understanding of “the spirit of foundation”, “educational philosophy” and to progress it. For this, progressive

process formation with various discussions as medium is necessary. By starting this, it will be the organizational “wisdom”, education and research that is geared toward true “living” is expected to start. With this overview, we established cooperation research project with a few people. “Philosophical and Theological Reconsideration of ‘the Christian Ethos of Momoyama Gakuin’: relating to the meaning of ‘living’ and concept of ‘service’ (April 2011 to March 2013). This project has been continuing for the last 2 years in order to publish a book *Spirit of Freedom and Love: Challenge of Momoyama Gakuin University* which discusses the “spirit of freedom and love” freely from the standpoint of each participant. This thesis summarizes the background of the publishing based on the result of the research activities of this project so far.